

「あなたがたは世の光です」

マタイの福音書 5 : 14 - 15

August.23.2026

マタイの福音書 5 : 14 - 15 (パワポ)

Preface

「救い」とは何でしょうか？

聖書の言う「救い」とは何でしょうか？

教理的に言うならば「救い」とは、「本来、神の前に私が掛けられるはずだった罪の十字架に、神のひとり子イエス・キリストが、私の罪の身代わりに架かって下さったこと。

そして、そのイエス様の身代わりの十字架が私のためであると信じ受け入れるならば、罪赦され、死より復活されたイエス様のように、死んでも生きる永遠のいのちを与えられ、罪ゆえの燃えるゲヘナ・地獄ではなく、天の御国にて神とともに永遠に住まうこと」という風になるかと思います。

でも、これを、もう少し分かりやすくと言いましょうか、簡単に簡略に私たちの肌感覚で分かる、直感的に迫って来るように表現しますと、今読みましたイエス様の御言葉通りになるのかなと思います。

「あなたがたは世の光です。」

つまり「救い」とは、私たち一人一人が光であることを悟らせて頂くことだということです。

「あなたがたは世の光にならなければなりません。あなたがたは自分の能力を磨いて、社会の利益になるための努力を惜しまず、人から、世から認められるような使える人とならなければなりません。世から注目を浴び、人から賞賛され、表彰を受けるような人生を生きて初めて、あなたがたはこの世の光となるでしょう」ではなく、レベルや肩書きや経験値や境遇や身分に関わりなく、「あなたがたは世の光です」と、イエス様断言して下さいました。

聖書の言う「救い」とは、「私という存在は元々、神に、世の光として造られたんだ」ということを気付かせて頂き、悟り、受け入れ、私という人が本来何者なのかを知ることでもあるように思います。

さらには、「あの人も、この人も、どんな人も、元々、神という唯一の創造主によって世の光として造られたんだ」ということに気付き、互いに受け入れ合い、互いに喜び合い、互いに支え合い、互いにその存在価値を認め合い、互いが互いにお陰様で生きている、互いが互いに放つ光を受け合いながら生きているという事実を悟ること、これが、イエス様の仰る「あなたがたは世の光です」という言葉に込められた救いのメッセージなんだと思います。

ヤコブの手紙 4 : 12 に、「隣人をさばくあなたは、いったい何者ですか」という言葉がありますが、隣人をどんな形であれさばくことは、「あなたがたは世

の光です」というイエス様の仰る「救い」に真っ向から反する行為・思いになってしまふんだと思います。

Part One

私自身、このマタイの福音書5章14節の「あなたがたは世の光です」というイエス様のお言葉に初めて出会ったのは、クリスチャンになったばかりの大学3年生の時でした。

マタイの福音書1：1から聖書を読み始めて5章に入って、「心の貧しい者は幸いです」という言葉と、「あなたがたは世の光です」というこの言葉に釘付けになりました。

特に、この「あなたがたは世の光です」という言葉は、私にとってどれほど嬉しく、どれほど解放と安堵を与えてくれたことか分かりません。

「私」という存在は、何かをもって比較されるべき存在ではないということ。「使えない、役に立たない、値打ちが無い、期待外れだ」と、能率や効率や費用対効果で評価されるような物では決してなく、天地万物一切合切のものをもってしても比較出来るような存在ではなく、神の前にあつて無二の尊い存在であるということ。

どんな人の前にあつても他に類を見ない、神の前にあつて絶対的な特別な存在であることを生まれて初めて、揺るぎない確固たる思いに至るような気持ちで知ったような気が致しました。

目から鱗が落ちるかのようでした。

それまで、自分で自分をさばくこともしましたし、また人をさばくことによって自分の正しさを示そうとしたこと、自分の光をもって人の闇を照らしてやっているかのような高慢さを持ち合わせていたことも、一瞬にして心の中で露わになったような気がしました。

そして、その高慢さに執着することは明らかな間違いであり、その高慢さに執着することに執着しなくていいと思える安堵感のようなものを感じました。

無理に、自分で光だと思っているような似非の偽の光のようなものを放ちながら、自分の価値を人に認めさせようと意識的か無意識的なのか生きて来たこと、そして、もうそう生きる必要はないし、そんな生き方は神の前にあつて罪なんだと思えたように思います。

それまでの私の生き方は、「光にならなければならない」ということを人生の目標にしていたように思います。

国語数学英語理科社会の点数を人様よりも多く取り、運動も出来、楽器も弾け、お金も稼げ、人から褒められ、羨ましがられ、カッコいいと言われ、人に指示される側ではなく人に指示出来るような人にならなければならない。

「立派だ」と、「使える奴だ」と称賛されるような、光のような存在にならなければならないという比較とプレッシャーと、そうなれるかもしれないという根拠のない期待と淡い希望の中、霧の中をもがくように生きていたように思い

ます。

鬱蒼と茂る道なき森の中を彷徨い歩くかのようにとりあえず前に進み、所々出て来るそれらしい目的地面したようなところに辿り着くことを目標とし、また度々そこに到達したと思えた時には、そのことを喜んでいました。

別にそれが悪いということではないと思いますが、試験の合格とか、昇段試験に受かったとか、臨時収入があったとか、欲しいものが手に入ったとか、草野球でヒットを打ったとか、願っていたことが叶ったとか、束の間の「喜び」と称するあっという間に消えて無くなる幸福面したものを消費した後、また新たな目的地面した場所に向かって、「人生、これで良いんだ」と自らに言い聞かせながら歩んでいるのか、彷徨っているのか分からないような道程を、霊的に死んだ目で生きていたように思います。

そんな私がイエス様に会い、イエス様が私の心に魂に触れて下さった時、読み始めた新約聖書のイエス様の言葉、「あなたがたは世の光です」という言葉に生まれて初めて出会い、ホッと、解放されたような気が致しました。

マルコの福音書5章に、悪霊の群れに憑りつかれていたためにこの上なく自由だけれども、同時にこの上なく不自由な束縛の中を墓場で生きていた男性が、イエス様に出会って解放されたことが書かれていますが、同じようなことが私にも起こったように感じました。

至って自由だけれども、何とも表現し難い私という人の奥深いところの不自由な束縛感に苛まれていた。

でも、そこから解放されたような、私の奥深いところから湧き出るような清々しい気持ちです。

何よりも感動したのは、「あなたがたは世の光となきなさい」ではなく、「あなたがたは世の光です」という英語でいう *become* (なる) ではなく、*be* (既にそうなんだ) だということです。

何か優れた存在、何か有益なものをもたらす存在、何か光り輝かせなければならない存在になるのではなく、「もう既にそうなんだ」と、「あなたという存在そのものが尊いんだ」と、「光だ」と仰って下さっているイエス様の言葉に光を感じました。

それまで、人間が作り出した、また提唱した光面したまやかしの光を追いかけるような答えのない渴望から、その光面したものになるように迫られていたところから引っ張り出された、解放されたような気が致しました。

「僕は既に、この世にあって光なる存在として神の手によって生まれさせて頂いただけでなく、あの人も、この人も、あんな人も、『こんな奴も』と思っていたそのすべての人たちが、本来、光なる存在なんだ！」と、「僕という人が居なくなることは、この世の光が失われることであり、あの人が、この人が居なくなること、この世の光が失われることなんだ」という人としての根本と言いましょ、人という存在の価値そのものを表す答えのような言葉として迫って

来ました。

「あなたがたは世の光です」という言葉があまりにも嬉しくて、そして色々な人に知ってほしくて、大学の友人たちに、「おい泉川、お前な、お前は神さまに愛されている存在だし、この世の光なんだよ」とか、「ねえ佐藤さん、あなたはね、愛されている存在だし、光なんだよ」と言いまくっていました。

もちろん、「あなたがたは世の光です」と仰ったイエス様の言葉は、先ず第一に、キリストを信じる人に、信じるようになった人に向けた言葉であると伝統的に解釈されてきましたし、その解釈に私も同意します。

ところが、イエス様がこの言葉を語られた時の聞き手たちは、マタイ 5：1 を見ますと、「群衆」と書いてあるんです。

つまり、キリストを信じる者たちは当然、まだキリスト信じていない者たちにも、イエス様は、「あなたがたは、唯一まことの父なる神にあって、本来、光なる存在なんだよ」と語り掛けておられるようにも見受けられるんです。

キリストを信じていない者たちには、まだ自分たちが世の光なる存在であることが分かり得ていないけれども、神は、「あなたがたは本来、世の光としてわたしが造った、わたしの目には眩しいほどにの尊い無二の存在なんだと伝えたい、知って欲しい」と、私たちすべての人間に語り掛けておられる神のもどかしい愛の言葉のように、初めて読んだ時感じました。

この言葉は、イエス様が 30 歳になって公生涯を始めなされて、初めて御言葉をお語りになった山上の垂訓の中での言葉です。

イエス様は 12 歳という幼少期からもう既に、他の誰よりも、神の言葉そのものなるお方ですので、どんな立派な聖書教師たちよりも聖書の御言葉に精通しておられましたし、聖書の言葉をすべての大人たちが感嘆する程に、分かりやすく且つ権威をもってお話をされていました。

もし 12 歳という少年時代から活動を始められたら、「神童」と称えられながら、正に「生ける神の子だ」と称されながら、ちやほやされながら、正に「明けの明星のように」扱われ、世にあって繁栄大いに出来たかもしれませんが、そうはされず、それから約 20 年間もの間市井の人として、一庶民として、当時の社会の最下層にあたる大工仕事をしながら人々とともに暮らしました。

その生々しい人々の人生の真っ只中でイエス様が感じた、見た、生きた、実感した人々の暮らし、様子、人生の労苦や悩みやリアルな生き様をともに過ごした中で、「どういう言葉を先ず第一に掛ければ、この人たちにとって力となり、希望となり、元気となり、活力となり、解放となるのだろうか」とお考えになりながら、神の言葉そのものであられるお方イエス様が、人々に向けて語り掛けた言葉が、「あなたがたは世の光です」という言葉でした。

なぜに、「あなたがたは世の光です」という言葉だったのか？

皆が皆、自分が神によって造られた光なる存在であることを忘れて、知らずに、

認識出来ずに、「光にならなければ」と比較され、比べられ、計られ、評価され、値踏みされながら、富と権力と教育などの外見的なありとあらゆる格差の中、もがくように、彷徨うように、自分の足りなさや弱さばかりが目につき、人を羨み恨めしくも思い、目の前にあることだけで精いっぱい、目の前にあることを何とかこなしながら、目の中の光を失っているかのように人々が死に生きているので、そんな労苦から解放し、そんな霊的盲目から救い出し、真理なる答えを教えようと、「あなたがたは世の光です」と語り掛けたのかなと想像しました。

「神とともに、キリストとともに生きて初めて、人は人らしくあれる」ということ。

「クリスチャン」とは、本来の人の姿を取り戻させて頂いた人たちの呼び名であるという事実を隠され、自分が本来光として造られたことを知らずに、恐れ、度重なるサタンが人を通して編み出した多種多様な物差しによる比較と判断と裁きに傷つき、怯え、高ぶり、疲弊している人々の姿を見て、最大の慰めの言葉を真実として話して下さったのが、「あなたがたは世の光です。あなたがたは本来、世の光として造られた尊い存在なんです」という言葉の真意だと思います。

Part Three

今日は、障がい者福祉礼拝ですが、「障がい者」という言葉、または概念ほど、「あなたがたは世の光です」というイエス様の私たち人間の存在そのものを言いつつ真実の言葉に反する言葉もないように思います。

イエス様の「あなたがたは世の光です」という言葉に倣うならば、本来、人には、障がいも何もありません。

一人の人が神によって造られ生まれて来たならば、生まれてきたすべての人は、生まれてきたという事実だけでも十分に神の愛のうちにあるということです。

もちろん、私たちすべての人には、神の前に悔い改めるべき罪が住んでいます。神様は悔い改める者たちの罪をいつでもお赦しになる準備を万端に整えて下さっています。

即ち、「障がい者」という言葉や概念は、「能率や効率や優勢・劣勢などの人の考えだした物差しによって編み出された偏見と不条理が、形として無理矢理表現されたものだ」と言えるのではないかと思います。

利益やコストパフォーマンスやタイムパフォーマンス等という経済産業的物質主義的価値観に偏重した物事を見る目に、人間自ら捕らえられてしまっ出来た人間の浅知恵、短絡さ、残忍さ、ずるさ、選り好み、偏愛などが形となって表立って社会に表れたのが、「障がい者」という言葉ではないだろうかと感じるのです。

もし、「障がい」という言葉が「弱い」とか「弱者」という意味を持つ言葉ならば、弱くなく、弱者じゃない人がどこにいますでしょうか？

私たち皆、弱い存在です。

つまり、「誰もが障がい者だ」とも言えるように思います。

このことを使徒パウロ先生は、第一コリントでこのように言っています。

コリント人への手紙第一 12：14－27（パウロ）

22節で、「それどころか、からだの中でほかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです」と言っています通り、弱さを自覚する私たち一人一人は、無くてはならない存在なのです。

ある牧師先生が、「家族の中に弱い存在がいて初めて、家族は健康でいられる」と仰ったことがありましたが、正にその通りなんだと思います。

私には、腰や首の椎間板ヘルニアとか、手術を受けても中々抜けない肩の痛みとか、原因不明の紅斑症とか、高血圧とか、こう見えまして色々と体の弱さを抱えており、「主よ、癒して下さい。なぜ、あの人のように、この人のように、万全の体ではないのでしょうか」と恨み節を並べながら祈ることがありますが、「神さまは、私の予想を遥かに越えて、私の健康を守っていて下さっているなあ」としみじみと感ずることがあります。

どういうことかと言いますと、体中悪いところだらけなので、毎日運動や筋トレをせずにはいられないですし、弱い部分をかばい補うためにしている運動や筋トレが、結果的に体全体の健康を保つのに大いに役に立っているということです。

私は、神さまに「弱きを取り除いて下さい。直してください。変えて下さい」と浅はかにも訴えるわけですが、神さまは、弱きを用いて体全体を強く健康に保っていて下さっています。

使徒パウロ先生の第一コリントの御言葉を、私自身のこの肉体をもって実感すると同時に、色んな人間関係においても、人同士の存在の尊さにおいても、「そうだなあ」と、時に適って思わずにはいられない時が良くあります。

牧師の中にも色んな人がいますが、牧師のくせして人に会うのが苦手で、人と話すのが苦手で、孤独に一人であることを好む方がおられます。

でも、人に会うのが苦手な代わりに、孤独の中聖書の御言葉と向き合い続け、祈り続け、神の御言葉を解き明かすことには熱心だったりします。

その逆もあります。

一人でいることが嫌で、御言葉を孤独の中で深く読み解くことは牧師のくせして苦手けれども、人と一緒にいて何かを人と一緒にやることは得意だという方がいます。

ハゼのようにジッとしていることが得意な牧師か、マグロのように泳ぎ続けないと死んでしまう牧師か、以前の私は、「そのどっちも牧師らしくない」と思

っていましたが、私が尊敬しています大きな教会を牧会しておられるある牧師先生の言葉にハッとさせられたことがあります。

その先生がこんなことを仰っていました。

「私は人と会うことが苦手です。でも、一人で孤独な時間を過ごしなが、神の言葉と読書に没頭しながら、御言葉を取り次ぐ準備をすることにおいては、全く苦になりません。

だからと言って、私が正しいわけでもなく、私のような者がすべてではありません。

色んな牧師を用いてキリストのからだとして一つにして下さっているのは、神です。

批判する前に、我が身を、他者を感謝出来なければと思っています。」

アーメンです。

Part Four

以前、人を重んじると言いながら、人を重んじることが出来ていない私たちの姿を垣間見るような報道を目の当たりにしたことがあります。

「弱い」というレッテルを社会から無理矢理貼られて、言葉ではとても言い表せないような悔しい扱いを、国や社会や人から受けておられる「障がい者」と言われる方々がいらっしゃるということです。

20世紀初頭から、近代化という効率や能率などの経済産業的価値観の台頭によって、「遺伝的に劣悪な人間を減らし、優秀な人間を増やす」という優生学なる偏見の塊みたいな悪魔におもねるような考えを採り入れた政策が、先進国と称する国々で進められてきました。

この日本でも、つい最近まで、障がい者の方々に無理矢理不妊手術を強いる優生保護法なる法律があつて、その被害に遭った多くの方々が声を上げておられます。

その内の一人の方について書かれていた新聞記事を読んだことがあります。

ある91歳になる聴覚障がいのある男性が、幼い頃から親からも、「アホ」「役立たず」と罵られながら育ち、就職しては障がいを理由に給料を6割に減らされ、でもそんな痛みを共に分かち合える伴侶になる女性に出会って、「たくさんの子どもと、にぎやかな家庭にしたいね」と語り合い結婚致しました。

念願かなってご夫人が妊娠しますと、このお二人の親同士が話し合つて、妊娠をされたご夫人に無理矢理堕胎手術を受けさせ、避妊手術までさせられてしまったというのです。

もう一つ、古くなった名古屋城復元を巡る討論会で起こったことについて書かれている新聞記事を読みました。

エレベーター設置を訴える障害のある男性に対して差別発言が浴びせられても、その場にいた市長や市職員は、その罵声を止めることもなく、あたかもコストパフォーマンスやタイムパフォーマンスなどの能率や効率にエレベーターの

設置がそぐわないかのような態度しか敢えて取ることしかなかったということです。

私たち一人一人が構成員であるこの社会には、未だに、優生保護法などの悪魔の考えに染まっているような法律は無くなったかもしれませんが、変わらず優勢思想が蔓延しているということが明らかな事実であるだけでなく、私自身も、所謂健常者として、そんな姿勢や雰囲気醸し出して来たのではないだろうかと思わざるを得ません。

でもそんな中であっても、一方では、母親のお腹の中にいる時に酸欠状態になったことで脳性麻痺になったある男性を中心にして、その男性の生活を支えるリハビリの輪が大きな家族のようになり、むしろその男性を手助けをしている側の人たちが、そのリハビリの輪の中に入ることによって癒され、慰められ、力を与えられ、逆に肉体的にも精神的にも、励まされ、力づけられていると言う報道を目にしたこともあります。

この脳性麻痺のある男性の母親が、息子さんについて「重度障害者」という呼称に苦悩されながら、息子さんのリハビリを始めた時には、「健常者に近づきたい」という気持ちがあったということです。

でも、息子さんのリハビリの輪の広がりをご一番近くで体験して、「私は幸せ者。生きるということそのものが尊いことを知っている大きな家族が出来たから」と思えるようになったと仰るんです。

「弱者」とされてきた人たち、または「障がい者」とされてきた方々を中心に、人々が寄りあい、助け合い、命の尊さ、存在の尊さ、互いになくてはならない存在であり、一つのからだとして機能しているんだということを実感しておられるのです。

御言葉の通りのことが、主なる神様の一般恩恵・恵みのうちに、私たちに示され、なされているのだと思うのです。

土浦めぐみ教会というキリストのからだである一人一人の存在によって成り立っているこの群れは、「皆が、世の光である尊い存在であること」、「その光一つ一つが、キリストをかしらとする掛け替えのない体一つ一つの部位であることを追い求める群れでありたい」と願っています。

そして、その姿が、世に対しても、人々の目にも、光として映ることを願ってやみません。

Conclusion

最後に、からしだねの理念と土浦めぐみ教会の障がい者福祉理念を皆で読んで終えたいと思います。

からしだね理念（パワポ）

人は皆等しく、神様に創造され、愛されている存在であり、一人ひとりがそれぞれの使命を与えられ、生かされています。

ですから、互いに与えられているものを用い合い、補いあって成長し、豊かな人生を歩めるようにチームで支えます。

障がい者福祉理念（パワポ）

1.障がい者の一人一人は、神様に創造された、かけがえのない尊い命であることを告白します。それゆえに障がいを含めてその命が、神様の御手の中にあることを、厳粛に受け止め、その存在を喜びます。

2.障がい者の一人一人とその家族は、神様に生かされてきて、人の深みという宝を持っている方であることを告白します。それゆえに一人一人に、心をこめて寄り沿う支援を心がけます。それは、寄り添う私たち自身が、学び、成熟し、豊かにされることだからです。

3.障がい者の一人一人は、神様に愛され生かされている神の子です。それゆえに、生活の不便さや、生きづらさや、差別の中でも、著しい寂しさに取り残されることなく、一日一日を豊かに生きる支援プログラムを提供します。

4.障がい者の一人一人は、神様に期待されていて、神様へのユニークな奉仕を委ねられていると告白します。それゆえに、可能性と成長を共有して喜び合い、共に生きて行きます。

5.障がい者の一人一人は、神様に導かれて、豊かな人間関係の中で生きることが期待されていることを告白します。それゆえに、一人一人が家族と、からしだねと、土浦めぐみ教会および地域社会のなかで、豊かな交わりを持てるように試みます。

聖書の御言葉を黙想する中で示されたこの理念を生きるような私たちでありたいと願います。

一人の人が障がい者ならば、皆が障がい者であり、一人の人が世の光として造られたならば、神の赦しの下生まれてきたすべての人は、世の光です。

「世の光です」というイエス様の言葉から、誰一人として漏れる人はいません。お祈りいたします。

祝祷：マタイ 5：14 a